

サイの御教え ババ様の三十五歳の御降誕祭における御講話（上）

カメラのシャッター

Gokouwa1.jpg

先ほどクツパ バイラーギ シャーストリがブラフマジグニャーサー（ブラフマンの知識を得たいという願望）とアートマ（真我）についてあなた方に述べたことは、非常に造詣が深く、非常に有用です。規律と学問において一定の段階に達した靈性修行者にとっては、とりわけそうです。けれども、話の大部分は、あなた方には理解の及ばないものでした。私の務めは、あなた方が今必要としていることを、甘くて消化可能な形にして与えることです。クツパ バイラーギ シャーストリは、ウパニシャッドについて、あらゆる解説書からあらゆる引用を述べましたが、それでも、彼が話したアートマの概念を把握するのは難しいことです。

宝飾品は、どれほど多くの型があろうとも、どんな形状をしていようとも、その主材料と地金は金です。一個の宝飾品になるということは、金の普遍的な

性質を失くすか、制限するということです。金という名前と形を失くして一個の宝飾品になるということでは、分離感を持ち、一なるものを忘れるということですから。アートマは変化しません。誰もアートマを変容させることはできません。アートマの性質はさまざま無知のベールで覆い隠されています。ティヤーガラージャは、「テラ ティーヤガ ラーダー」（あなたはベールを取り払ってください）という自作の名高い歌の中で、どうかベールを取り払ってくださいとヴェーシカテーシワラ神に祈りました。

そのベールは、心（マインド、マナス）や理智（ブツデイ）等々と呼ばれています。宝飾品は、自分は今も昔も将来も、楕円形でも四角形でも円形でもなく、アングレットでもネックレスでも指輪でもない、ということを知らなければいけません。宝飾品は、本当のものではない自らの外観はさておいて、真の性質を知って自らの根本的な真実を自覚することを切望しなければいけません。宝飾品が再び金となったとき、あるいはむしろ、自分は金以外の何かであると考えのをやめたとき、その宝飾品は至福に達したと言うこと

ができます。

愛は光への大いなる思慕から始まらなければならない

あなた方は体を住まいにしているのですから、体を「私」と呼ぶことはできません。ここでホールの中に座っていても、あなた方はこのホールを「私」とは呼びません。あなた方は、ホールと自分は別個のものであり、ここには一時的にいただけだということを知っています。馬車に乗って移動しているとき、あなた方は馬車のことを「私」とは言いません。自宅に到着して馬車から降りたとき、馬車を自分の家の中に入れるようなことはしません。それと同じで、あなた方が「家」に到着したら、体は脱ぎ捨てなければなりません。あなた方に内在している「私」は、パラマートマ（至高の実在）です。「私」とは、深い海の上でしばし風と戯れる小さな波です。小さな波は、その下に横たわっている悠久なる紺碧の海とその波は別のものだという

印象をあなた方に与えます。しかし、それは表面的なことにすぎません。それは名前と姿という二つの概念の産物です。この二つの概念を捨てれば、海の波は消えてなくなり、実体がぱつと現れて、あなたは知ります。

パラマートマは人の中で愛として自らの栄光を現します。愛は、富、親、子、生涯の友、友人などへの愛着といった、さまざまな形で姿を現します。これらはすべて、同じ炎の火花であり、普遍なるものの愛がその最高の現れです。愛は、ガイドブックやハウツー本を読んで、お決まりの方法や手順を学ぶことで培うことはできません。愛は、「タマソーマー ジョーテイル ガマヤ」(暗闇から光明へと導いてください)という祈りにあるような、光への大いなる思慕、暗闇から逃げ出して光を見たいという耐え難い苦痛から始まらなければなりません。その思慕こそが光をもたらします。愛はひとりで大きくなくて、ゆつくりとした、しかし、絶対の錬金術によって、あなたを神へと変えていきます。プラフラードは悪魔でしたが、それでも、愛がプラフラードを解放させました。ジャ

ターユは鳥にすぎず、ドウルヴァは幼児にすぎず、ブリンダーヴァンの牧童たちは文盲の田舎者でしたが、それでも、その錬金術によって、皆、愛の光を浴びて輝き、光源を知りました。

死に際に発言力を持つのはサムスカーラ

神の御名は甘さそのものであり、あなたがひとたびそれを身に付けるなら、あなたに内在しているあらゆる甘さを目覚めさせます。その歓喜を味わったなら、あなたはもう一時もその食物なしではいられません。それは肺にとっての空気のように必要不可欠なものになります。あなた方は、「プラーナの神話によると、どれほど略式であっても死ぬ瞬間に神の御名を思い出せばそれで十分だということを聞きました」と言うかもしれません。しかし、もう何年も御名を唱えていないのであれば、その時になって御名を思い起こすのは一仕事です。いつでも自分が望む時に神の御名を意識の一番上に持つてくることを今から身に付けておかなければ、神の御名は、死に際に込み上

げてくる感情と押し寄せてくる思考の中に隠れてしまおうでしょう。

昔、ある一人の店主が、「アジャーミラの物語」に感化され、自分も息を引き取るときに神の御名を思い起こそうと決めました。そのために樂をしようとして、その男は自分の息子たちにさまざまな神の化身の名前を付けました。自分は死に際に息子たちの名前を呼ぶに違いないと思ったからです。ついにそのときがやって来ると、予想どおり、男は息子の名前を一人ずつ呼びました。息子は六人いたので、男は神の御名を唱える代わりに息子の名前を合計六回呼びました。息

ー アジャーミラの物語…「バーガヴァタ プラーナ」第六巻にある

話。敬虔なバラモンの男アジャーミラは、森で淫らに戯れるシュードラの男女を見て性の虜となり、妻を捨ててその女を妾にして囲い、強盗や窃盗をして暮らしながら十人の子を設けた。老いて死の神の使者が命を取りにやって来たとき、アジャーミラは溺愛していた幼い末の息子ナーラーヤナに向かって「ナーラーヤナよ、ここに来てください！」と叫んだ。すると、ナーラーヤナ神の従者たちがやって来て、死に際に神の御名を唱えたことで清められたとして、地獄へ墮ちるべきアジャーミラを生かした。命拾ったアジャーミラは再び本来の敬虔なバラモンに戻り、悔いてヨーガに専念して天界にたどり着いた。

子たちは寄って来て、父親のベッドの周囲に立ちました。それを見て、いざ死ぬという時にその瀕死の男の頭に浮かんだ思いはこうでした。

「大変だ！ 全員が来てしまったら、店は誰が見るんだ？」

皆さんもわかったでしょうが、その男が一生を通じて命のごとく大切にしていたのは店であり、死が目前に迫った短い間にそれを神へと切り替えることは無理でした。あなたが何を望んでも、発言力を持つのはサムスカーラ（行為の報い、心に刻まれた印象）です。

信じなければ進歩は不可能

最期の瞬間に神の御名を口にするのは容易にできることではありません。それには、深く根ざした信心に基づいた、何年にもわたる実践が必要です。それには、憎しみや悪意を持たない、強い人格が必要です。なぜなら、神への想いは慢心と貪欲の風土では生き長らえることができないからです。さらに、いつが最後の瞬間かなど、あなたにどうやってわかりますか？

死の神ヤマ（閻魔大王^{えんま}）は、あなたを捕まえに来ることを通知しません。ヤマは、カメラを抱えてスナップ写真を撮っている人のようなものです。カメラマンは、「用意はいいですか？ シャッターを押しますよ」などと知らせはしません。もしあなたの肖像写真を天国の壁に掛けたかったら、その写真は魅力的なものであればなりません。あなたの立ち方、ポーズ、笑顔、すべてがよいものでなければなりません。そうではありませんか？ ですから、昼夜いつ何時^{なんどき}でも神の御名が口元にあり、神の栄光が心に広がっていて、いつシャツターを押されてもいいようにしていることが最善です。そうすれば、いつ撮られても、あなたの写真はよいものとなるでしょう。

最も必要とされることは、徳を養うことと、罪への恐れ、すなわち、過ちへの恐れです。あなた方は、行いや思考が、罪深いものか、誤ったものかを、どうやって判断しますか？ それはシャーストラ（経典、法典、論書）と内なる声を基にしなければいけません。信じなければ進歩は不可能です。それは物質界において

もそうです。科学は、最終的な証拠として、「目に見えるもの^{ブラテイヤクシヤ}」を考慮します。しかし、「目に見えるもの^{ブラテイヤクシヤ}」はどれくらい信用できるものですか？ あなた方は、人が着ているものや髪型といった、^{ブラテイヤクシヤ}「目に見えるもの」を基準に尊敬するのではなく、人格や成し遂げたことといった「目に見えないもの^{パロークシヤ}」を基準に尊敬します。

あなた方が今苦しんでいるのは、すべての執着が^{ブラクリテイ}現象界に向けられ、すべての無執着が^{ヴァイラーギヤ}プルシヤ、すなわち神に向けられているからです。これは逆でなければいけません！ 現象界への無執着を培い、主なる神への執着を培わなければいけません。

あらゆる喜びは神の一切普遍相から引き出される

私は今、シヤンカラ バッタの物語を思い出しました。彼は骨と皮になるほどジャパと瞑想^{ディヤナ}に没頭した偉大な靈性^{サーダカ}修行者でした。バッタはサラスワティー女神（学問の神）を礼拝していましたが、これは解脱^{ムクタイ}への扉を開く鍵です。ラクシュミー女神（富の神）がバッタの

悲惨な有様を見て、大きな慈悲により心を動かされました。ラクシュミー女神はサラスワティー女神に、「あなたは自分の信者に並の生活を送る喜びを与えることさえ拒んでいる」と言つてたしなめ、ならば私がバツタに恩寵を与えようと、雨漏りのするバツタのあばら屋に忍んで行きました。ラクシュミー女神は、「私が豊かさと繁栄と名声と幸運を授けてあげましょう」とバツタに言いました。そして、サラスワティー女神のことを、自分の不運な僕しもべに快適さと喜びを授けることを怠いとつていると言つて嘲いってあざけりました。しかし、シャンカラ バツタはラクシュミー女神の示す魅惑的な提案には耳を貸しませんでした。バツタは丁重に、しかしきっぱりとこう言いました。

「いいえ、結構です。サラスワティー女神は私に最も貴い富を授けてくださいました。それは私を解脱させてくれる英知という贈り物です。私はあなた様の恩寵は望みません。どうか私の前から立ち去ってください」

自分が抛より所とすることのできる神よりも壮大で

莊嚴な存在はありません。どんな御名でもその神を呼びなさい。あるいは、御名を持たない存在としてその神のことを口にしなさい。神は有形サーカールでもあり無形ニラーカールでもあります。海水は水を入れる容器の形をとります。器に入れられると、無形のものも形を持ちます。絶対者が個体へと変形するのです。しかしながら、あらゆる喜びは神の一切普遍相から引き出されるところを、あなた方は見出すことでしよう。無形なるものは喜びも悲しみも引き起こしません。無形なるものはあらゆる二元性を超越しています。

喜びを与えてくれるのは宝飾品であつて、金きん(宝飾品の素材)ではありません。あなた方は、御名を体験すること、御姿を心に刻むこと、御名と御姿をハートの中に据えてそれらに浸り、それらが呼び覚ましてくれる喜びに満たされることができます。だからこそ、ジャヤデーヴァ、ガウラーンガ、ラーマクリシュナといった者たちは、砂糖になるよりも蟻ありのままです。砂糖を味わうことを望んだのです。御名は種のようなものです。あなたのハートに蒔まかれて神の恩寵が注がれると、それは芽吹いて愛らしい樹木になります。神

の御名から芽吹いた木はどれも等しく愛らしく、大きな木陰を作ってくれます。もしあなたがクリシュナの御名を所持するならば、あなたの勝ち得るヴィジョン、あなたが呼び出す御姿は、クリシュナの御姿です。もしラーマの御名を所持するならば、芽吹いてくるのはラーマの御姿です。

疑念を持つことで心が揺れるのを許してはならない

リーラーシユクハは、よく耕された自らのハートの畑にクリシュナの御名を植えていました。そのため、クリシュナは、孔雀くじやくの羽を着け、横笛を持ち、魅力的な悪戯いたづらっぽい微笑みを浮かべて、彼の目の前に現れました。もしどうしようもなく絆ほどされれば、神はあなたが深く心に秘めている願いを一瞬のうちに叶かなえます。あなたはまだ、疑念を持つことや失望を抱くことで心が揺れるのを許すことさえしなければよいのです。すべてを神に委ね、気楽にしていなさい。舵かじも碇いかりもない船が嵐に巻き込まれるように、海に翻弄ばんりやうされるのは、もつぱら信心のない人間です。信者バクッタは人生の浮き沈

みに耐え、平常心を保ちます。

あなた方は、信者バクッタは困難と悲しみに悩まされる人生を歩み、高次の力に従わない人間は何の心配もなく繁栄しているかのように話しますが、これはまったく間違った認識です。信者バクッタは安定した船旅をします。信者バクッタには、内なる平安と喜びの泉があり、それらは共に信者バクッタを守護し、保ちます。

バイラーギ シャーストリは、今日は私（ババ）の誕生日なので、あなた方にとっておめでたい日であると述べました。しかし、言っておきますが、私には今日のような誕生日がいくつもあります。あなた方にとっておめでたい日は、あなたの心が清められた日であり、私がこの人間の体をまとった日ではありません。私はずっと新しく、ずっと古く、ずっと新ヌーしいものであり、ずっと古代サナータナのものであります。私はいつも、ダルマを復興するため、徳高い人々の面倒を見るため、そして、徳高い人たちが向上するのに適した状況を確保するために、やっ来て来ます。疑い深い人はこう尋ねるでしょう。「パラマートマが人間の姿をとることなどできません

